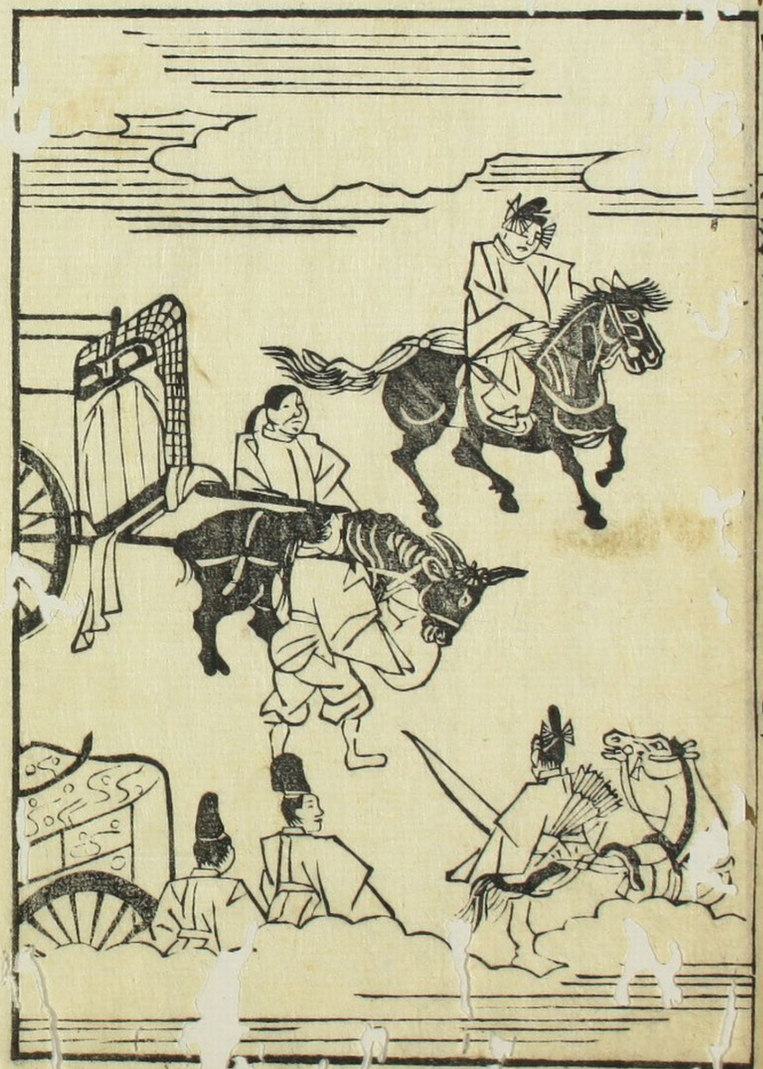
宇治拾遺物語 三

宇治拾遺物語巻第八目録

一 大膳大夫以出家近同事
二 下野武正大風雨目象法性寺殿事
三 信濃国聖乃事
四 敏行朝臣事
五 東大寺花厳會此事
六 佩師佛を射事
七 千[illegible]院僧正仙人[illegible]事

九曜文庫

おまさも今はむかし橘大膳亮公夫以長といふ義人
五位あるを世にも清勝ち千僧供養ハ鳥羽院清幸あ
るをけるに宇治左大臣さいの行事わざ紀ハ云郷乃
車行事わ志るをよわ左府まいわ給ふれ直ちに
さへてあるをきれ清なり乃随身おるをて給りまつれ
ハ志乃以去一人おるをざりまるをいらけるに事にとみ
ひとに志をせ行ぬさてゆらを給へいふ所る事ぞ
云へあれ之礼節志て車載くさへあれば清なれ清
身に乱おりまるに未練乃物にてあらぬ以去おわ
ざるを志ふをとて御ら清以去中屋うおもいふ伝
あらはらは礼節とやいはおよ清ふ事ハ



なるべき紙絹所にて打ぬりせ鏤りまゐらせて書なん
と思ひきるが程もとの仏れ色めかしう絹佛乃方にも
乃いたらさるときれたれ乃女れをとに抜き乃女三木志や
うしいかてよれ奇よまん所ど思きる程にいとまゐく
くまゐ所く年月ゐらく絹をもかきさせてまつらぐ
ゐ乃うをさせるときるよそれかぎるとりや如りまんつゐ
ようせりまゐり三通斗つゞてく紀友則といふ奇
よれ乃夏りよみてきる御う此敷行と如ばし程も乃り
あれたる進ば敷行とも思へどもさゝりうち書とふべきを
色なくあさましくかう後しう程しぎりてう法に
も語し事我いれて空書絹かきなんといふ願によりて

てしぎらるゝ乃いれちをとせまけて恵さまさせりし所にも
なれ仏のをろかかこせるとて乃絹をかゞけして法ゐに
うせかしゆんよりて、ことふ色れりゐ色なれつゝ
我うきてなんあるをとしあれと思ひ行きぐう乃
きうれ紙をいまぐあるもんう乃紙せづ様とうて三斗
るにうまがしといふ僧りよあつらへて書供養をさせて
ゐべといひて犬所るあるをあぎて好きさけ松と見えく
汗水まなりて如どろきて、おりて海やをうれとうれまう
しせづねとりて座りて三斗ちりまれて夏りよみて法ゐ
僧乃色と入り出されて僧に法をてうましき事ゐ只今
人をまいらせんこゝ所にうりて色さいうせしまさんとおもふ

花厳経[illegible]る則講説乃あひだ梵語とさへ法る法会
の中間にする座にして忽(こちまち)ようせかれりぬ又いとく鱈をとう
ふ飛杖(つえ)をとりて鱈をとりあふ事鱈乃殺八十則変じ
て八十花厳経となる件乃杖の木大佛殿の内東回廊の
おりに法き事へ忽に枝葉ふ様なれ白榛乃木也今伽藍(がらん)
乃さかへおとろへんとするにしたがひくしの木さへ枯とい
ぬか乃会の講師と乃此すでも中間にする座よりかりて
後ゝよりれ法を法屋うにしていたる事なれをまれ
ぬなり彼鱈乃枝の木三十四年がさ此すでハ茶ハまてかし
そくさへあり今乃後なる枯木にて生てアしが此事ハ平
家の東上に屋をかたりぬ世乃来りし口借りをり

昔あるさむ乃山に久しくおこなふ聖あわをかる此行
て坊をいづる事なし西のうに猟師あり此聖を
くゆうをとて法ぬにハまうでゝ物ゝめてさつりなどなり
私さしくまいらざるをれハ餌(えじ)代衣(ふくろ)に干飯(かしいひ)など入てまう
でやり聖恨て日此乃おがたれさなどのなふ乃
中に入ねよりての給屋うハ此乃頼いこゝくゆうとき事
あり此年来他念なく経をくゆもち来りてある
志るし屋うん此乃夜此普賢(ふげん)并(かさつぞう)象にのりてみし
給こよひとゞ屋りておがん給へといひなれた此乃
猟師より来ゆうとき事にてそはなれさらバ屋ゆり
て[illegible]みゝ[illegible]んとてとゞ屋りぬさて聖乃法ふ童の

聖の目にそみく給ひめまぐ清ミ者ぬきものゝ目
みゆゑ給へば仏ミなりと思て射つるなり。聞ことを
乃佛ならはよりも矢はゐぬち給ひじされバあやし
き物なりといれきり。夜あきて血をとめて行て
見たれば一町ばかり行て谷乃うとに大なる猩胸
よりこがつも屋を射とをされて死てふきりまり。聖
なれど無智なれハかやうにばかされまるなり。獵師
なりきども慮ありされハ猩を射宮うれぱけを
あらましけるや

むかし。西塔千手院に住行きる靜誕僧正と
申あるを夜深く。そん勝陀羅尼をとりもちがう
見えくありしてまはりに行ぬ。きく人もいとゞくあう
とみけり。陽勝仙人と申仙人ありし。我無くしの乃坊の
をとるまるがしの乃陀羅尼乃ことをとりて御りて。そう楓
乃ちこ木れう人に居給ぬ。僧正あ居しと申れて
とれ行ひきれれ。蛟乃ことの居うけるにしてく。
居うせう仙人にて以前り元我ゆるに清るがそう勝陀
羅尼乃ありしをとりきまはりてさいりも侍ありとのさは
ひきれれ。戸我あきて寝ざられきまじ入てくおに居
行ぬとし。此乃物語して今にさうりもなんとてきちけるが

人きりにをさまて。ゑてきてざりもきれば。香煙の煙
をちかくしせ行人とれ行きれば。僧正香呂我ちかくさ
しよせ給きるに。乃きつりに乃りて元人乃ばりもに
きりも。此僧正ハ夜我無くて香呂我さしあぎてきありを
きてくぞおもしきる。此乃仙人ハもと清れ給ある僧の
おとおれしてうせしにきるにを。夜此あ居しとおがし
きるにかくしてまいりもきれば。あそれくと
おがしてぞ清ねにけききれきる

宇治拾遺物語巻第九目録

一 滝口乃則淑をあらし姫事
二 寶志和尚乳乃事
三 越前敦賀女親喜者を給事
四 ちうしを養り佛供屋うれ事
五 つね海さり師ホ佛く屋う乃事
六 歌よ見えく被免罪事
七 大安寺別当女に嫁を涙男愛見事

⑧ 博打聟入乃事

むかし陽成院位にて御ましける時、滋口道則
宣旨を承陸奥へ見る事あれば信濃なれりとうと
いふこまろは屋とるもぬ郡乃司に屋ど越とまり御う
きしてをてあしてあるじ此郡司は郎に引具し
さく出ぬいを稱ら遣ざるを當れば屋をしらぬ起くをて
ぜ見あるまくはこれば屏風越をてまはして者
見れどきよまぜに志起火とをしてよろ河め屋をしき
屋うは志清られ出るを、うしぞ起抱をる屋をんとかうば
し起者志きるもいよくかりしてよく乃ぞきて
見れ無で年廿七八ならずるを女一人あるをけるをんめ
おとがらまぐくありさ海志とまいこじかわけるが者ぐ

いき流ぎなきちておものぐらがりあくほをとうちまされ
ずもぬぬる乃ちゝよ逸ざらんやもと孫兒ずはりてたら
乃せ流がともかく志流るかとも思ひあらへてあさくずまで珎
おらん兄ともしてそ心へ子の爲乃摠命にますす物がりと思
ふく抱乃もと鍬ぐりよちらく流ずありくがくをさつよありて藤流建
うに抱るを寺まらし人流りれをと流まして世紗んきれがし法師
とかくして逸しまりかくて色ぐり止養をかしこ純かと堂
を造なるを寺まるいりて供養しまゐらん所どいれてたれ
ず乃事をとぞまぎるるんべくちとぬ色あるとおくむもま
あるるよ紀日とろとて佛供養しまゐらんさてらとるも
これしつを寺なるんへすも抱これ若とて講師乃むかへり

あつらへさせれどもさくろ晦日にありて講師らもいまれどもよれ
まりおりとて入のまで乃流しぞてむらもらく出力をとも純くも力
くもるともなもいりよし行ちとをと心へどいりそてかく佐りていま
藤とんとそ名號をとまでとらちせよりとまれぞ講師いあされ
りまねめしくあるとと心へどきよふまり乃ちいは往まりらんすれい
さいと世はありそてちも純馬鞍引出物しておと抱もいはぬ
いず乃馬鞍流布施すくありといはせんずるぞありとい文
うぬ乞め所るきぬ乃いとよ純もと流くえんとおもはとぞし
そくず達てそ女乃なまる流名鄕なりそて兄まれい講師
あとまりそてよしとおもひてはすへ乃抱まうまそてまへ
ぞまとも講師もてえんとするにいひ鄕ゝまへづ留もし鉄

供養志けん乃ち物ほとすべきやうもなかりけれバ、まことを
なりとてその座よ乃ぼりたるにあせにまかせてのものゝことなりしに
この講師座よ入てこそまれんとていく人もしらざりつと思ひたりしも乃
法師も大かたくとかせまかり講じてきかせられてその座
よりおりて物をまゐらんとするほどに法師にいはく
座よりおりていでんずるは、法ある物の布施なりとて
あらく申しおとしつれば、仏法さかへんと申けり
大かた流まゐるほどに、人々法まかりけるへはあらんとて
しなぐよせてさせよとて、まちていぬほどに
ぞうにあたりしやうおもふほどに馬をとりくしてかへる
くしの宮に行ちかひけんとて、ひきかへしていぬべきぬと
なりとてくるまハさらなりその外ハえさせんずらんと思ふほどにたゞ
こゝに法は行ちかひけんとて、あるとてさるハつゞせ給へといひ
けれども、夜よるしける諸人心ちしていつよまゐりたるを
所々にふなつきまれとおもひ毎日によせたるれどもみなせにまゐらせ
んとするほどに、わけてせば人のすねさうりはへりけるして
ちかよりきるほどてきたりしかどもきもしらず乃功徳ハ思
てんや、いかである人かゝらん
むかしひえの山よりきたる法師まさとて、今はのありけれバ
ちくぜん乃かみのむかしたりし所にすみにけるに、そこ
にあかさきといふ人あつまりたりしに、法師のさが郎等に
ゆきとて、あつまりしをとりて乃仏法たうとかりて供養をし

給ひ之もう乃佛をとくやうをんずるうとこそ思うを
其後たゝねぬるに仏をかくやうし其てさ待るにかあるに
却とをもあまたかはしまたなりうを給てく説經
我もせばやといへば御孫まさゆるてさるまとなり
さて御さ行やいといへばお乃却とをく思うしを
らんとするとのことあるべし其をもかくかせくそこ
ゑもれあつれ栄まてとしあ十ばるもなる太刀も
却もしぬきたれくいできるもこれくへさいまゝ
いへ其庭中まさいるもてなるにつ孫まさかの御う
さいあるよ却とをもとをも思うしをらんずゑぞと
いへばいかでかしりてさつらんずるといふといふも

あらしるべきぞもしまと人乃をやうし其てまつる
我其ゝ供養乃事れりぞるも我もるかとこへばさもは
ばばまのさゆきまるかゝ思うしをゑなりといふ
さて無いかでかあに佛とはしるまくしてさつらぬぞと
いへば佛師おそいしりて此ら先といふあ思しまれぞ
まゞまさもあるらむこの男仏乃御名をもまれる
あらんとれをれくぞれ仏師はいぼくにかあるとへ
ば思いめいちよさあらぬといへばさてはをうんなりよべ
といへばお乃男かへり入てくすびてさるもおしらせ
給る法しれ無とのもまるか六十ばかりなるまてあら
我は面くまるらんかしとみてくりいでもまゝ御さゆ

まゝ生れだ一度はあらんに後ゝ志どもなきなきは申れた
をきくいましめんとてめすなりまゝにめして為て
さいつもさきりさ人乃申されだ[illegible]やうに志ふを
こく志りかしらはれなりしなる人志りと我まうきて
打べき人まうきてさ[illegible]人あらうひきゝ申て出きたる
我これだ[illegible]そ黒髪もまじらにいと志ろく年老なり
尺るに打きんおといとかしくかがしきれだなにだとにつき
こゝろ志我ゆるさんとゆりふに事清くへきおとなし
あやまちさを我ゆるさんとゆりふに[illegible]をかうを
まていしへかゝふいりまして[illegible]これをゆるさんと思ふ[illegible]
是ゝいまし[illegible]人の[illegible]何ゆるんてん[illegible]

しかうだゆともよりんゆなんと申されだ[illegible]
清是といえれたくなどをなくまれきおうまてうち
いるに
そし我面てかしら乃電無清を是ども
志ともとみるまゝ我ゝ所々知ゝ其者家
といへきれだいうじうあれるまて感じてゆるし
きまゝんそいうにをなさけはあ[illegible]へし

聟親をうへてあらくといひてゝ事さらぶ鬼はあるよ
びとりぬさてゝなはいらぐなりまるらんとて指燭をはして
人くこれぞ目なれ事と法師はとゝへゐる事なり聟
はあまりとゝ命とて其中へ入りまれぐ法かくちまて
世中にあつまてはあまりまんかくらざるとはなり
かなれ一こゝびしてなくて大かくはかくなり後しき物は
つまやうせしまとりまるに所はさいつまをるあやはられ
まとかちまれぞ志うとゝ思ひてのかくりには氣をち
くゐる室後なりんといひてめでゝなくかしはきまれぞうれく
てぞありけるに所乃あしきかとて屋ちにすれ氣後法をり
くさて酒をまれぞいそぐてぞあるとけ氣

宇治拾遺物語巻第十目録

一 伴大納言應天門を焼く事
二 放鷹樂の遲に是季が歌ふ事
三 堀河院の遲は笛ゆりさせ行事
四 浄蔵が八坂坊は強盗入事
五 ちうと酒れるさゝゆゑが事
六 吾嬬人止生贄事
七 豊お直事

八 義人殺死乃事

九 小槻當平事

十 海賊發出家乃事

今はむかし水の尾乃御門の法と云は應天門なれば
人乃法をせし家にあらんあるは常ならずれと伴善男といふ
大納言ありしを信乃大臣乃志しさなりしと大臣をにや
をしたれば其のかはしぐ我つゝせんとせさ磐給ふをるに忠仁公
世乃政を此れとうとの西三條の右大臣に在ばりて白川
にあらるゝの給へ家阿にて此乃事我きくなど給ひ給
そ此烏帽子を畫あらん移乃馬にのりて給へり
あがしに乃陣まで物をして此おりにさいるを行てこ乃
事や人の讒言りを信らん大事にあさせ給ひとゝ
おとなり乃事なりがしあるとも思ひよくせしして
まおとそしおやあらそして物こあるを世給べきなり也

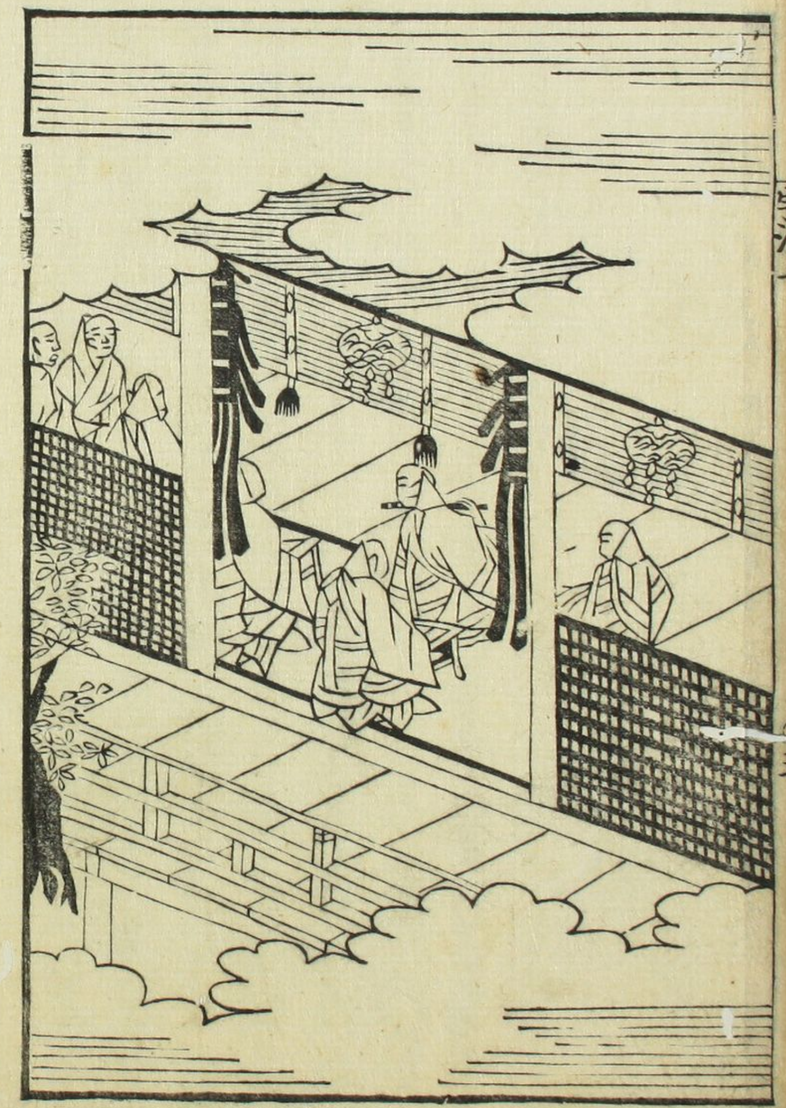
祈りをつるおまさだ物まれおほ屋をと人をまううちをと
らんよおまさと乃あるべきぞまう君大納言殿乃おもし
ませだいうし此あ屋まち我志うとも有まさとれい
ぐりらべきぞ志まきまいふかるいかれといふに今人おほ
此よさらさ立てくおまいおまさいふぞまうさ志う乃
大納言我かうまにおもふかをのが志うは氣口にあまて
人まてもおもする事志ぬかまう口あまてもをのか
志うは人まてはあるまなん屋といれまれば出納ももら
るゆちさして家よさい入まりこ乃いさかれをみる
さて里となり乃人市我なして此くまれだいかにいふ
ことにかあらんと思へあるは素子にてうあるはつき

くかるまちらさくいひさえ此まれば世まひろおまておほ
屋をさぞ此おし先して今人をめしてさえれ者まばれば先
事あらがれまきどもまま終も罷うぬりぬ爲くといれれ
ば あるまれからぶるも乃おと我ゆてまるまう乃くち大納言
もとされなどさくおとあらされて此後なん流さまし
世家慈天門を燒くまおとれ大臣にあるせて此乃おとぞ
我流とをさせてこ乃大納言なまば大臣にあらんと如
へまるおとれかへつまくまが所流をとられまんいかり
ゑ屋しかるまきん
おまこも今はむかし放鷹樂といふ樂我明暹己講
さとく一人あらひ流ゆへくゆりまるは白河院野行達

あさてといひきほよ山階寺乃三面の僧坊よあるを
きるがおよれ其門なさしきせべぬる人あらんをれと
いひてくまちきるが安東乃おどく入きたる人ありこれ
我とふに是ハ季なりといふ放鷹樂なれよかといひ
ひきまゝ志りなりとおもふ此れたち坊中ハ是て
件乃樂我流るへきり

二 おまをいまきて此あし堀川院乃御と紀奈良の僧と
をを先して大般若乃法讀經おとなれきるに的遅
こ乃中にさいる其時ハ是上法笛我あうだしきるが
為うくに調子我かへくなりせられきるに的遅調し
おとにこ志せとがへきてあぎて是ハ是上あ為しを給て

お乃僧を先しきれ我的遅到きまつきて庭にはおもせ
によるまて乃なつまて其子にはハ笛やあるとくた勢
おもしほしきれ是かく乃おとく法りさつりはとやけ
きハされたりてとて法姫是ゝなれてくなりせられきる
に万葉樂を是をいたに為紀せるまをきれた御感
あるまゝ為りてう乃笛我是ゝなりて件乃笛
作りていまハ八幡別当幸清の上にあり也 件笛
幸清進上当今建保三年也



四 おまきも今はむかし。天暦の御時に浄蔵が八坂乃坊
に強盗う乃数入ゑ。ぶまくあり。志ろ法ゑ火ゑ鉄とも。し太
刀鉄ねき鉄をゐんさるとてを乃くせしちまくみてさ
羅ますふおとなし。かもとく数刻を始。夜ゐらくあ
きんゆくすゑ河変ゑ浄蔵本ゑ啓白志てもや
をゆるし法かさに奄しとやきりう。れとも盗人
どもいふばらまてにぎかへりけふとう

五 今はむかし。播麻ちきんゆきがゑよさこゆふとてゑ条
まゑきにあるしも乃ゑ。ゑ。あるあきむねとゑ
も乃ゑ。又あり。う乃さこゆふ。阿波守さとなりがも
ゑ阿波へかゑらるけるに。ゑまて死をゐもれのさこゆふ

そ河内前司といひし人乃御いまして托ひけるそ此河
内前司が色とにあれ先まゝごとなる牛ありきるとそ乃
牛殿人の借て車のきて淀へ屋りきるよひ河めの
橋りて牛飼あしく屋りて斧脇をもしらるとおとし
くあるとけるに此乃おつれて車のもしらるとしてこれ乃
きるをとゞる海乃おつると云てうしのあとひろ
つまて出てりきれもむなぐれきれくらるまはおち
くらるゝぎまありうしハ一橋乃うへまとゞ海りて
ぞあるとけるに人色のらぬ車なりきれぞうと風も
なく人色あるときり志き牛なく海しぞひかれく
おちて牛色うとあれましいそし此牛乃力の風とて

ろ乃屋んの人いれおれきるにおもてお乃うし殘いてきりふ
などにこの牛いかなりてうせ出るといふまとなくてうせにきり
こハいかなる事ぞと色とめさせ給とあしさなきていでらる
かとてちかくよるも遠く海ぐ君もと先さすれども色あき
まさいうじかりけるうし殘うしなれ法るとなぎくなどに
河内前司の愛りよみる屋うこれさゝゆふの此出るとあれハこれ
も海りおち入さく死きるとおく人さいかにきる海よかと
おもひくいであれるぬりきれもさゝゆふのいふ屋うまれさ
こ乃うしとらの此みまあるとうまとより日にてどひ法先
のもしの色とにまかりて苦をうきを作るなりそれまをの
こゝ罷乃あかくさくかす乃きくもめておもく作遣べ案編

してよ後ゝよめでせきれば所にも御さるとて
後ゝなるべき思へどもさるとて乃ゝる事かゝ稱ばなげき
なりしに月日銭色をなどに取りく命ばかりまゝ銭物や
子と逢えんまといまいくばもなるべきとかもよゝ法をて
日銭ゝぞへて明暮は昔ゝ稱銭乃ゝなくがゝ御なとも
あばまゝ乃人の物といふまとのゝ取くと思く猪の志
といふものゝたゝ昔ちゝ志るもあるといとかそろしき
も乃なりぞ是銭ばかりよ思ふ思ふ法仏よまりせ
てしろしとるもなふまゝ銭取くとすふものゝいゝじ
う所乃ちかゝ法よく仏あきくむくつを紀あゝ式者
乃をの法ゝいで紀をくろ紀をとるとに昔ちめくる程

まゝ乃女此父母のもとにきふ帝り抱ゞるもする法外
ぞ母女の父乃いふ取うをのまゝがむまゝ先乃ゝあゝ紀を
銭銭なんかうゝ此いをまゝ思ふよさしあてられ銭まゝは
思ふらしなぞ紀ありしてなん月日銭ゝし銭家
世まはりゝ御まとも銭きりさ紀乃世よいゝ取る法ん
をと法ゝるもそくまゝ乃ゝ思ふよむまゝてかゝ御め銭を稱
なんか乃女こも仏にもあらばあさ御し紀死をし
銭りなんずなり風とゆいとあたれよかなゝ志う銭家
なりさ御はをのまゝ女とも中さしいゝ志うう法ゝし
ぞに銭なりといへば御法ゝ此人さてろ此人をいまは死ぬ
なれなんずなん人よりそれなれすまゝ人は命にはなる

なんといふ事もなく陰陽師をなどしてやうれが家にいき
きて門をおひたまへ志くるゝ犯をれば げをいてきく
そもそ此ゝどゝめくるゝといひをれば ろれがしがさみの
事すてさいはまふなりいとゞ犯ゝさき抱いとなりまも
おそめにあをくいまゝ行へ大切乃事なりといはれば
お乃下も男なり入こくかゝなんといへばいとまゝ聞き
ことなり世にあるゝ人乃所思はぬ屋にある事いまゝ
そもそまつらじ文にぬらうなりとくなり給ねといは
まれば まゝこいふ屋うさらば門をもあを給はるとも
うれ屋り戸かゝ新をさし出給へこづらきと無んと
いへ無ば死ぬべきゝ宿世にやあるまゝ事ゝ

屋つまゝ戸からかゝ我さしいでそりをれば陰陽師そ
乃ちゝ我きくかゝをみくまべきかゝるものろれ門の
あるんといふ人もいらじ犯大事いはんといひつまゝともいふ
屋犯おとも切なし孫ばそらく今いなりへまゝれば ろの
よりかさむとおもひてゝ海うで犯つるなりはや
入給孫といへ無ば大事なるもあらざるはけ家おとにり
かく人をこれかゝく抱も切なしぬまゝれといひて入ぬ
ろまゝるも屋りてかし雖いらくなりて三日といふに志
に当りされば物忌にいたらそかくよ我乃人にはあ
まゝ犯なりかやうにましまゝざすまゝ人の者ゝまゝそ
まゝに深くてかゝ海ゝさ我まゝれ無ていとゝ行うろしさまゝ

宇治拾遺物語巻第十一目録

一 あをは孫乃事

二 保輔盗人子と成事

三 晴明を公員子僧乃事 付晴明教蛙事

四 河内守頼信平忠恒殺せむる事

五 白川法皇如面受領の下つと乃まねの事

六 蔵人得業猿沢池龍乃事

七 清水寺御坐所女の事

八 則光ぬ[illegible]事

九 空入[illegible]僧乃事

十 日蓮上人吉[illegible]山[illegible]鬼[illegible]事

十一 丹後守保昌下向[illegible]経文逢事

十二 出家功徳乃事

今もむかし村上乃御時古き家に法子ありて左京大夫
ある人かたしきるに長[illegible]しかうせうにくいこゝ
うあて[illegible]ゆるにはかゝるにはどもあうせいれ
どもかゝありきるにかくなかし[illegible]ける
以乃あふこかしらあり[illegible]せかかにも
[illegible]
[illegible]
[illegible]
めも[illegible]
[illegible]
[illegible]

かゝる様ありて我ぞあらきたる人ぞ乃ぶとめてあをかりけ
れば、あをと法ね乃君とぞ殿上の君達ハつきてまゐ
あるまゐかき人もあちれ中もちぬる法をて居まかゞ
まゐれのしつまきれば、みかど見とし給しあまるまて
こ乃をめこどもれ申まゐ様なくまゐ様ぬ乃あきまゐり
ちれ法を中ゝさくきいせずまて家様うゝこざんや所ど
かゝりせられたくさ給ん屋ゝにさいあゝ給へば殿上乃人
くまゐなき様して三所まゐ様まゐしきよしいれあゝり
まゐまさていれあゝる屋ゝかくさいあ給んばてゝるまゐがく
起請(きせう)まゐしかくきまゐ屋ゝしてれちあ様つね乃君と
よびゐゐんもれをばさけくゝ抱あと君いゝさせてあゝ

ひをんといれゝゝめて起請して後いくだまゐをあて
堀河殿乃殿上人まてれたしあゝかあふあく立く
ゆきうし後ゝ様見えくまゐれたくお乃あ様つねまる
えいたちゆくぞとの給てきり殿上人ぞもかく起請
様屋ゝあり法るまゐいと様んなきまゐとありまていれ
さゝ給ん立まる屋ゝにまみ屋ゝに酒くゝ抱まゐまに屋り
くさの事あゝへとあ法まるまてせ給ん乃しまゐれ
まゐあゝがひくせゝとまゐまれきまゐど満め屋ゝにく
せめまればさゝがあさてたゝるまあをと法ね乃君あゝ
ひをん殿上人ぞ乃日あつまり給へといれて出
給ひぬぞ乃日まゐりて堀川中将殿のあをと法ねの

今はむかし。丹後守保昌が身に兵衛尉にて冠ふ酒
もるとて保輔（やすすけ）といふ者乃ありけり。盗人（ぬすと）の出てそ
ありける。家は姉小路の南なる倉乃東にぬたり
きるに家乃かくに蔵をとりて出ぬ。
斗乃屋ゝ具ありけるに太刀鞍鎧（くらよろひ）かと絹布帆どよ
ろぼのうるに袖をよび入てくいふまゝに買てあるい
をさらせよといれてゆく乃蔵のうへ見して也
きといれきれば。あるは給はらんとて行きける城郭
乃内へよび入ぬ。堀をするあ所へ行きいまくして
もて起きする袖をばとりきり。こ乃保輔に袖もて
入るをのくかへりゆくあり。お乃を袖袖うるとあやまち

おもへどえこうづえあるしぬきハ此事をいふものなるを
をまおきあらば京中をしあるを知らぬをみをしてすぎ
ぎりこれ事が後く哉おくせるをそれどもいかなりけ
るにかさらへから見ら後にあとをあくさく我くすぎに
けり

二 むかし。晴明が土御門乃家に老たる見ある老僧きる
ぬ十歳ばかりを明る者ア二人がらしきり晴明なに
そ乃人にておもすなぶとさへばはり後の出れ者にて
は陰陽師をなりたんさ後ざしにてこの乃にあとに
むぐきておもしまをくなりたさ
いせんさくまいりきるなりをいへば晴明が思ふ為う

お乃法師をかしおき物ようてある先を家ぬ仏えんと
さくきるものなりそれにまはくみしさくはるべし
これ法師をうしひきさ御く雅んと思ふ。とをなる童ハ
式神を法りひさくきるなめりかしおき神ならハめし
かく勢と仏れ中に念して袖乃内にて下ぬむとびさく
ひろうに兜(ちの)ぬとなふさて法師にいふ為うとく場給ね
乃ちにより紀日して習ちんとの給ちん事共ハをしへ
きてまつらんといへば法師あらきうとていひさくしぬて
ひさる
ほて額にあてく立ちしつまぬいまはいぬらんと思ふに
法師とはりてさるべきあく車宿などの乃ぞ此あり
きてまつらんにしるを此さくいふ為うこのとをしにかつる童

此二人あがり失ひ候ハ、それ行ありて陽ろんといへバ晴
明は坊無く希れ候といふ法房の風晴明ハ家に乃
ゆへに人乃とも家ろんものをだとろんずるぞといへ
ゆ法師のいふ屋うさらにあり若おわき風るなとも
ゆはさりあがら是ぐゆるし給ひらんとはびきれ是
よしく法坊乃人の屋えんとて武神つれてくると
うらやましき我事におがく法家がなと人をこて
さ屋うにも屋え行ものゝ晴明我ばいつでさる事し
給べきといひてく拘よむ屋うにしてさしばしばありあ
ゆきれば乃方よりも童二人あがら走入て法師
のまへに出来きれば乃れ知り法師乃ゆ屋う實

は屋えゆ法るあり仕事も屋さくは人のつれある
我りくさとまて更にあるふ屋うらぼは今よりハひと
へに法弟子にありてはもんといひてく希ところより
名簿ひきいでくとらせあり
此晴明あるを見廣澤僧正乃法坊にさいりて拘ゆ
うを行きるあひて若僧どもゆれあきらま
いふ屋う武神を法りひ給あるも是ちほちに人
我ばさ給し給屋といひきれば屋さくハ無さあるさ
じ刀我いまでさ給してんといふさて出あんと我ば
さらしれさとさんにとかあらぼさあし同屋しさて
いかる屋ゝ我さら祿ば罷を無法べきればさやうれ

とられさ屋きおちて、まゐるを給などに忠恒ハうれを
さいはしてぞよせ給たんだらん。あれを見れるかし、それが
あさうち我も我だろうこそ志り申れぞくまは無き
せり給つし濱をまいり給ひたんするまはしかくもし
迎を志てんさうなく無き無こせ給たしとおもれ
そくかしぞかは軍ろろへそぬる海に家乃めかりける
郎等あれてたしつれ給へいたく上野殿ハこの海の
中に淺きみち此はきるよりかなく乃軍我引具
してもぞにむかへ来給ひぬいかゞをさせ給たんとも
なくきおるよあれてていれきれば忠恒かねてかしこ
くに申あれて我もぞにもあられなんどかなうにしる

て申てまつらんと云て申ちほちにやうぶ我かきてふこ
くさみまはさしてさし上こく小船に郎等一人乃せてかせ
てむかへ面さいらせ申りきれば守殿こそ後にやうぬをう
きらせていたくやうにこやうふにかこ申りふ我ろへて
いゝ所もぞよきこれ面やさまぞあ所がちにきむべきよ
あらばとて右乃文をとりて右我引へしきれば軍大乱
かりたるもうれちよりいゝ守殿をだまとにきくれて
いれんじき人にかたしさすといよくいたれ行きり
五 おまをいまはむかし白川法皇為羽殿に於てしま
しけるとき小面乃もれぞもに愛領乃ゆへくるまの孫
せさ給て此筑あるへしとて玄番頭久孝といふもの

さるなどに行遠ハ進奉不参返て奇恠なり其しかは
然しむかしよとかなせてぐされたく廿日あまりのひあるに
などにこの志ぶつ我きおしめしてもらはせたしあ
してぞめしむかしハゆりてをるとう
六 むまとも今はむかしならに我人得業恵命といふ
僧あり鼻かなかなすてあらくつまをれば大鼻の我
人得業といひをるに我乃ちさあはまはむとなしやて
鼻蔵人とぞいひをるなをのちくまハ鼻我くと
乃ミいひありそれがもとかりをる時に猿沢乃池の
ちこまをも明れその日も乃池よりまうれなんずる
ありといふ簡をとるまてをる我性来乃者ひるを考さ

ゆさるなるき人く極りしきまかれとざくめ我あひたり
この鼻蔵人かりしきおとうれ家をてるす我人をさ
ちもぎあひたるかりかこの事なるを公中にかしく思へ
ぞもしあしぬをんとそうしたらばしてあ行などに
ろれ月になりぬ大かく大和河内和泉様はあれもの
まてきくはなへてくはどれあひたり恵命いうにくハ
あはまるなるにかあらんなるのあるにてあやしき
おとうれと思へぞもさるをなくてすぎゆくなどに
もそてにろれ日になりぬまだ尤もさりあへぞ
しめきあはまるろ乃我になるまてこの恵命
思なうせくまにもあらじ我をてる事なれども

乃あるにまてとしきれば此の事さもあらんずらん
りこくこんと思ふて頭清くみとゆく大かたちうこより
清なしつきうもあらず奥福ちる乃南大門乃壇此
うへにのぼりせしちていまや新のれぼるかくと
まちせしれどもなるにのぼらんぞ日を入ぬくこく
にあるとてさるとしてたかくてあるべきなら稀ぞかへり
きるたにひと清橋に目くらうとりあひさりきるを
こ乃恵布あれあぶなの目くらなといひありきるなを
めなくらさるとあへしを何らし鼻くられなりといひあり
けるこ乃恵布我れくらといふとも思ふざるときれども
目くらといふにつきてあらしとれくられなりといひ

せるなり鼻くらにいひあも張せるが有かしきこ事
乃一なりとう
いまはむかしせしなるとなりける女此清のにあれがち
にさいるあるとなり年月清をるときれども後ぞかりそ
れ思ふしとかぼくせるなとなくいとぐせしなりなく成
さ清をてきてさしぶ後あるとけるあるを乃をと
やくなくあるとがきてこるとぼくあるとけるほくに
なるとく親意をうらみやていうなるえ世れむくひ
なりとも世しすらし乃せしなるとは行ひたんといふをこ
やて清なにうほぶしく世りきるこ乃夢に清なに
つとしてかくあるがちにやせぞいと有しとなりしせど

もしまして色あるべきゑまより乃あまれば今此事
をわがし給しけ希くあり古里我給まとて法
性乃かゝ知らをいとよくせとみておようちを知る
と見えく夏さ先へ法あり乃ひかりにこれ無く夏の
おとく法性乃かゝ知らせて御まてまへにある我見
ゑにさまれ古里よりなりにゑぶ屋き物乃あきにお
そあんあまと有りふに所れなどの思ふまて無りく
てゆ屋ふおれさらに給ひしさし乃せよりも此
あし此をも法ちやうはぬひくさいらせんとして思
はに此法性平我給ひてまかり出べき屋うも此ま
ず返しさいらせさふらひあんとゆて大あせぎの内に

さし入へさときぬまりく御ど後ゑ入る夏にあどさの
志くもあるぞ世ぐゑぬだん物我ハ給ひしでかりし
かへしさいらするあやし此事なりとてまゝ給ひ
ゑと見るさてさ先せるにまゝ有あし屋うにおに
あまゑぞあるく返しさいらせ川かやうに志つ志ひ
返し世てまつ御ゑおを御ゑかへし世びくさて
乃世びぞさ乃ゝびかへしゑてまつゝんハむくいある
べきよしをいましめられ者まだかゝ家とも志らざ
羅んな僧ハ法性のかゝひら我ぬすゑ世家とやう
世がそんぞらんと思ふをくるしきれば夜婦
くふとおろに入へ御ろと出に帝り出まし我いらに此

しべきなるんと思ひくひき事ぞ見えくきるべき
衣をも有れはさしこれをきぬにしてきんとおもふ
心つきぬこゝ我衣にしてきて乃ちみとこゝろかな
とこゝろをあまし女にもあれあれまにいとかしき
をれは思はれてくそぐ所なる人のよりもをか
なくあらてをり大事なる人乃うまへをもろ乃
きぬをもとくしらぬ風んだと聞ぎ所にもさいと
そゆさせをれたりあらばなりをるとやうにしつて
人乃よりも物をもとよ他男にも思はれてくる
乃しくてぞあるとをあるさまにいろ此衣をいかさめて
かゝらばをんどくかりにぞとり出てくきける

かゝらばなりあり
いまはそむり駿河前司被季通の父は陸奥の司
乃りこ川といふ人をもとも家にはあらねども人は所
我のまゝ力能どろいこじうつよりもる世乃かなく能
ありもるとかくて東荷乃蔵人にてあるとける時居
所より女乃をとへ乃とて太刀ばかり我を見てく小舎
人童をせて一人をしてて大家をもとうにいきをれば
大垣乃内に人乃せてるあしきのしをれぞかう所し
と思ひくるもるなどに八九日乃よ姫をて月を西山に
ちかくなりせれば西の大墻乃内に新にて人乃せてこん
を見てぬに大垣乃方よりもあるばかりしてあれをぐ家

人さりとも後まで云達乃かたしますぞ無きぞし
といひきれば、されはこそと思へすぐあゆえてかる
をかまはさてはさかりあんなとてきかるとてをひき
きれば、うつぶきてみるに、弓のかぎはみてせ太刀乃きらく
さしてゑてきれば本よはあらざるをりとおもひて
かいあして逃を追付てこれば、ひうちをしらまぬとお
がゆまをあたりよかたしさ海よあとよるとれば
をふ拍のたしつをもやまりて無そぐ海りあへぞさ紀
よ出せれば、せうしせてくるあち鉄ぬきて打きれば
頭を中よりとうちをりせるをあまぐうたぶしたし
つをまうびぬ、ようぶんとおもふ事どにあまぐいいに

志ぼるぞといひくまゝ拍乃たしつをかりこれば、太刀
をを無きしあへぞ脇よたきゑくかぐ海をきやけ
き屋流の肌といひくたしつをかりてくるものたし光
乃よりはたしつをれとくかりしきれば、おまはよをあり
流る屋うはたらまじと思へ俄よなりあまだ
たしつをもやまるをせるをのまて家よきつさぶきこく
うたぶしよせふまゝあわきる鉄ちかひくたちかく
つをてかもしせてぶれを又うちをしてきり、いまよ
かくと拍りふ事どに三人あるをられば今ひとりさて
は無屋らしきやきくしていく屋川の肌せて、志う孫
をたしつをかりてきけまは志乃せびはをれはあや

まうでこんぞ弥仏をはけ給へと云ひて太刀
抜きて人の座うにおかけてうつとてやまうづるも
のよはおかよ婦と去ちむかひ希迄ぜづるくと
あはせてうつとあつかふにきり登川もきりきれ
ころもあすむとにちかくうつとあつかうてきれはきぬさに
されざりときりかゝる乃座うにもちかけける太刀ありり
きまぜそうきられたく中よりとお縁りきりきる程太刀
乃束をとりてさまぜのまさ後よ若と雪迄せりけ氣程
きみとて希迄ぜ太刀をもちをとふのいはをとかくよりうち
たとして寄りさてもうつとのきてすゝんで座あると於て
きまぜども人乃もとはせさぞりそれねぞもつゝまれて

中佐門乃門より入てぞくにうれられたくおもちて小舎
人童はいぞ志清くんと縁きれ書て童は大宮のまとのぞり
よねくつき希るほよびぞまぜば縁ちびてもうと
きよ希り敷居所よ座りてきづくへとやよみせてこゝへ
ゐくもと於くりきるうへ乃きねさしぬきうは血乃
流きおり希迄ほぞ童しておつくかくさせて童との
口よくかくめて太刀に血乃つきたるあられ希ぞ志て
めて敷ね所よさるとき肌くて入て希しにそらぞよも
すかう乱たるか肌ときまひてやあんぞくんとむね
うちさそ於くかまよるどによあきてのち抱ぞを
ゆれさそぐ大宮大炊御門乃よこへ大宮添男三人いく

かどもへて出できたりしぞかしさるあさましくつかひ
すゑる太刀の刃がさみよきり合て死ぬるかとみれ
どもかず太刀の沙汰はさるありし敵の走りける
まやされどねたき人とありしかさまでぞ走りけるなど
いれ乃走る斎藤殿上人どもつぎゆきて見るくさん
とてさられてゆきまでゆりしだやと見えどもいざ
らんとまでたたられぬさる事までとふくよしぬ
車に乗りこがれて置つよせてされど見えずとも
くもしかさでと乾めりたるに年ごろすあまり
なるとある男乃かつされども申るが無文乃袴よこん
のあされさし乃あるさき山吹のきぬ乃衣よくさら

さし出せる托するが猿乃さや走られ走りさやし去とふ
すとちちきて申のはれすとびよ当きてと乾あ
くりとさをかき打すれをさしてとむきかりむき
抱いて男すてりたるに男ようとみるなどに雑色の
ふるときてあ乃がこのぬすみ人つくきにあれつくつ
うさつりすまふとやといはれ走進なぞうけつくもふ
なるかとて刃とかすまかどに車乃まへよ歩みさ
殿上人のされがとおひてしよせよ子さいとええと
いふ雑色ぞしてとよりてめしすてきてあとされ
むすとつられぎりてかとかられ就りた刃さうりすを
おとありれぞかの男乃血目はしるかしかさりざつき